

## 被災地を訪ねて

M.O.さん

私が被災地訪問プロジェクトに参加しようと思ったのは「行かなきゃいけない」と直感的に思ったからです。そして、参加して想像以上のものを得られたと思っています。

1日目。南三陸町に着き、さんさん商店街でお昼を食べたのち、地元で水産業を営んでいる高橋さんご夫妻にバスで町を案内していただきました。「本当にここが被災地なのか」これが私の第一印象でした。あるのは雑草が茂っている空き地だけ。しかし、ところどころに見える家の基礎を見て「やはりここが被災地なんだ」、そう思いました。二年の間にがれきは撤去され、何もなくなった場所に草が生えている。ただそれのみの風景でした。

東京で辺り一面ビルや住宅に囲まれていると想像が難しいかもしれませんが、雑草の生い茂った空き地が道路沿いにずっと続いている。こんな光景から、普通の家々が立ち並んでいた元の姿を想像できるのでしょうか。残念ながら、私にはできませんでした。しかし、自分の近所に置き換えて想像するとどうでしょうか。慣れ親しんだ家や、行ったことのあるお店、また、自分が歩いてきた道沿いにあったものがすべてなくなり、址には雑草が生えている。でもここは、その場所に元に何かがあったことを想像することすら難しい。そんな状況でした。

途中、高橋さんがさりげなく、ここに町があったんだよ。とおっしゃっていました。それがとても切なそうで。よく考えたら、私達にとっては「被災地」でも、高橋さんや地元の人々にとってはここが住んでいる場所なんだ、と改めて思い、複雑な気持ちになりました。もちろん、それだけではありません。山の途中で木が枯れたり途切れているのも見かけました。高橋さんは、それは、津波が届いたかどうかだとおっしゃっていました。「木がないところはここまで津波が来たっていうことなんだよ」と。想像していたよりも山の斜面のかなり高い所を見上げて、自然の恐ろしさを肌で感じたような気がします。

もうひとつ、心に残った場所があります。それは同じく一日目に訪問した石巻市立大川小学校です。聞いたことのある人も多いかと思います。震災の後の津波で児童、教職員合わせて84名の方が亡くなったり行方不明になった場所です。バスから降りて建物を見たとき、わたしは茫然と立っていることしかできませんでした。何と表現すればいいのかわからないような、ただただ圧倒されてしまいました。はがれた天井や校庭のあちこちに落ちている児童のものと思われる日用品はどこか切なげでした。建物に目を移すと、教室の壁が無くなり、三つもの黒板が同時に見ることができたり、崩れたコンクリートから鉄骨がむき出しのままだったり。状況を言うことはできてもその時感じたものは言葉にすることができません。写真で見ても思うそれとは全く違う、実物を見たからこそ感じ取れるものだと思います。高橋さんは、こんなにもなくなった方が出てしまったのは、職員が山育ちで、山が崩れることを恐れた結果、海のほうへと逃げてしまったのではとおっしゃっていました。まさかこんなほうまで津波が来ると思わなかったんだと思うよと。高橋さんは、地震が来たら、津波の事を考えてほしいと繰り返しおっしゃっていました。それは、津波で家や仕事などを失った高橋さん

が本当に伝えなかったことだと思います。

もちろん感じたことはこれらだけではありません。地元の方々や宮城学院の生徒さんとの交流もありました。これらのことを通して今回の訪問で、とても強く思ったのは“できるだけ多くの人に伝えなくてはいけない”ということです。被災地に行ったことのない人もたくさんいると思いますし、一度訪れたことがある人もいるかと思います。しかし、自分の目で今の被災地を見てほしいと思います。この感話がみなさんの心に少しでも残り、もう一度被災地の事を考えるきっかけになったら幸いです。



大川小学校



アンカーづくり



報告展示